

県内で唯一、家政科がある松江市宍道町の松江南高校宍道分校の生徒が、再来年春の閉校を前に、メモリアルキルトを作成した。裁縫や調理などの腕を磨き、巣立った

生徒は1300人。半世紀を超える学校の足跡を残そうと、在校生が、感謝の気持ちを一針一針に込め、大作を完成させた。

13年閉校

松江南高宍道分校

思い出込め記念キルト作成



校舎の前で、完成したメモリアルキルトを広げる松江南高校宍道分校の生徒と教員

学舎を卒業生、住民も協力デザイン

同校は、4年制の家政科を設けた定時制高校として、1954(昭和29)年に開校。近くにある紡績工場などで働きながら、裁縫技術などを学ぼうと、ピークの昭和40年代半ばには生徒数が240人を数えた。産業構造の変化や同町内に定時・通信制の宍道高校が昨年春に開校したこともあり、同校は2013年春の閉校が決定。家政科専門の学校として、全校生徒で作るキルトに学校の足跡を残そうと計画、昨年6月から準備を進めた。

キルトのデザインとしたのが思い出の詰まった学舎。開校前に使われていた宍道小学校時代を含め、100年以上前に建てられた講堂や、大正時代の木造校舎は「地域遺産」でもあり、地元住民や卒業生も下地づくりで制作に参加した。昨年6月に制作が始まり、教員と2年生から4年生まで31人の全校生徒が、15坪四方の布を、校舎窓のガラス板に見立て、それぞれの学校生活の思い出を刺しゅう。池のコイや庭の桜、実習で使った調理器具など思い思いの図柄で窓を飾った。授業時間外のほか、夏休みにも学校に通って制作に取り組み、完成したのは今年3月。5月25日のPTA総会で、横4、縦1・5のキルトをお披露目した。約40年前、紡績工場に勤めながら学校に通った稲村成子さん(61)は、後輩たちとの共同作業に、「生徒のがんばりに心を打たれた。学校が宍道町民の胸の内にとずっと残っていてほしい」と願って、生徒会長で4年生の仲佐彰子さんは「協力して作ろうという、地元の人たちの気持ちを強く感じた。完成してとてもうれしい」と笑顔を浮かべた。キルトは、12月に鹿児島県で開催される全国産業教育フェアに出品し、県外の人たちにも見てもらうことにしている。